

宗教と近代体制との相互協調性の比較研究： 台湾の「釈教」と中国広東省の「香花派」の事例から

慶應義塾大学社会学専攻 博士後期課程3年（助成時）
同上 博士後期課程3年（現在）

ケイ 光大

1 要約

本研究は、人類学的な比較研究を採用し、同じ起源をもつ台湾の「釈教」と中国広東省の「香花派」の事例に基づき、近代体制において、「釈教」や「香花派」がどのような形で近代の社会構図に組み込まれるか、およびその過程を分析するものである。釈教と香花派は、葬送儀礼を専門とする宗派で、民国時代以降、近代の社会体制の要請に基づいて再編されてきた。本研究は、近代体制における宗教の発展および位置付けの比較を通じて、既存の世俗化理論で捉えきれない「世俗／宗教」関係を明らかにしたい。

2 研究実施項目とその内容

新型コロナウイルスの影響で、申請者は現地調査に行くことができず、代わりにデジタル資料、専門書籍、地方の出版物、歴史的文献などを利用して、以下の研究項目を実施した。

① インターネットでの情報収集

2020年前半期、申請者は、新型コロナウイルスの影響によりもたらされた「世俗／宗教」関係への影響を着目し、新聞記事、SNS、事例報告などの情報を収集し、現状を把握することを試みた。

② 歴史文献・研究文献の分析と整理

申請者は、釈教の経文写本、80年代梅州の香花派僧侶が使用した経文写本を収集し、香花派と釈教の宗教観、および両者の異同を分析・比較した。

③ 香花派の僧侶へのインタビュー

申請者は知り合いの香花派の僧侶にSNSでインタビューすることを実施し、香花葬儀とその歴史について、大まかに把握することができた。

3 研究成果

① 香花派と釈教の異同を究明する

申請者は『臺灣釋教科儀彙編』（清末から日本植民地時代の釈教経文の写本）および『梅県香花一日両宵全集』（1983年の写本）の内容と聞き取り調査の結果に基づいて、香花派と釈教の葬儀の異同を明らかにした。

葬儀の構造から見れば、釈教と香花派は、「天／人間界／地獄」という宗教的地理観は共有している。葬儀の宗教的意味は、同じく地獄にいる死者を人間界に設置された祭壇に運び、天と人間界における神々の力を借りて、死者の罪や穢れを落として、往生させることである。一方、両者の経文と実践から、土着の信仰と融合した痕跡がある。例えば香花派の経文では梅州地域で流行っていた「慚愧祖師」が記載された。釈教の場合、釈教職能者は台湾の「大士爺」をまつる事例もあった。

② 近代体制に組み込まれるメカニズム：香花派の事例から

香花派と呼ばれる宗教職能者たちは、剃度の義務や結婚や葷酒食（肉や刺激性の強い野菜や酒）などに対する禁制がほとんどなく、とりわけ香花派は独自の儀礼（「香花」葬儀）を持つ、その儀礼には演芸やジャグリングなどのパフォーマンスも含まれている。2000年代以降、文化財ブームに乗って、文化財の関係者や地元の学者らは香花派の芸術的価値を世俗領域へ貢献させようとし、地域的特色のある香花葬式の一部の内容は「香花仏教」の芸術として国家級文化財に登録させた。それをきっかけに、「香花派」、もしくは「香花仏教」という教派の存在が広く知られることになった。結果として、香花派は「宗教」のみならず、「芸術」や「文化財」などの「世俗」の名目で近代社会に組み込まれる。

③ 漢人の神霊観を再考する

香花派と釈教の宗教観は、道教や土着信仰などの異教の神々を排除せず、自らの神明系譜に回収する能力をもつ。こうした漢人社会の万神殿、いわゆる「神霊世界」は近代体制と異なる論理で漢人宗教の変容を促す。釈教団体と他の宗教職能者はともに、普渡などの儀礼を行うことから分かるのは、仏教、道教、民間教派などの複数の宗教観念を融合する釈教集団の宗教観の特徴は、異質な神々を柔軟に包摂しながら、自らの「天／人間／地獄」という想像的空間観に回収する包容力にある。